The Grapes of Wrath における登場人物に見るSteinbeck

岡　崎　直　樹

序

近年のSteinbeck、もしくは*The Grapes of Wrath*に対する一般的な評価は、その発表から半世紀以上を数え古典の一つとして認知されているが、元来文学作品としての名声は必ずしも芳しいものではなかったといえる。その反資本主義的な作風は多くの者にとっては不快なものであり、擁護を期待しても良いはずだった共産主義者らからも作者は煙たがられる存在であった。なぜならばこの作家の作品は反資本主義的であると同時に共産主義の敗北をも示唆しているからである。例を挙げるならば*In Dubious Battle*は農地におけるストライキを題材とした作品であり、主人公ら共産主義者がストライキを扇動し数々の不幸を労働者達にもたらした後に敗北する様を描いている。また一部の聖職者や、「良識」者たちはSteinbeckが用いる文章が冒涜的であり世俗的であると糾弾した。これは作者の扱う題材が主に社会システムの底辺に位置する人々であり、彼らの世俗的な言葉（slang）をありのままに表現した事に起因する。それらの批判的な反響はこの作品が多くの否定的な問題を抱えている事を意味する。

しかし今日、Steinbeckの作品群が優れた自然主義文学としてアメリカ文学

史上において大きな存在感を持っていることは厳然たる事実である。特に*The Grapes of Wrath*は読者からの反響（Martin Shockleyの"Reception of the *Grapes of Wrath* in Oklahoma"によると当時のオクラホマ州では*Gone with the Wind*の次にこの作品が売れ、図書館でも大量に所蔵されるなど熱狂的な反響があったという）や売り上げという目に見える記録（『集英社文学全集（2巻）』のSteinbeckの項によると、発行したその年に43万部の売り上げを記録したとある）からその重要性を推すことができる。その衝撃的な内容から当時の社会システムの糾弾にばかり人々の目が行きがちだが、文学作品としてのその哲学は懐の深いものであり、その中でもTomたち労働者の人物描写は特筆に価し、作品の最たる魅力といって差し支えないだろう。ここではその人物達に焦点を合わせ、*The Grapes of Wrath*において作者の思想の体現という重要な役割を担う四人の人物、すなわちJim Casy, Tom Joad, Ma Joad, Rose of Sharonに着眼し、その言動、行動の変遷を追及し、そこから本作におけるSteinbeckの思想を検証していきたい。

1．元説教師Jim Caseyの説教

*The Grapes of Wrath*においてCaseyは、本人が不適格、落第者だと自認する説教師、すなわち教義を説くオピニオン・リーダーとしてJoad家に身を置く。キリスト教の根本的な人間愛の発想を抱きながらもキリストを知らず、したがってキリストを愛せずにいる真正直なこの男は自分自身がこのキャラバンにおけるキリストとして君臨するのである。

若い娘に洗礼を受けさせるたびにその娘と野原で寝るという悪癖を告白する彼（Ch.4）は、ある時はその行為を罰当たりな所業だと自らを責め、またあるときは所詮人間と人間が行う事であり、そこに善悪の概念を持ち出す事がそもそも間違いだと主張し、思い悩む。結局Caseyは神の言説の伝道者としての自分を捨てて、自らの女癖に思い悩む事から解放された。だが実際にはSteinbeck自身は聖職者の姦通にはさほど重要性を感じていない。以下は*East of Eden*からの抜粋である。

> They were not pure, but they had a potential of purity, like a soiled white shirt. And any man could make something pretty fine of it within himself. True enough, the Reverend Billing, when they

> caught up with him, turned out to be a thief, an adulterer, a libertine, and a zoophilist, but that didn't change the fact that he had communicated some good things to a great number of receptive people. Billing went to jail, but no one ever arrested the good things he had released. (Steinbeck, *Eden* 217)

そこには、実際にその聖職者が人々に善行を施したという事実を、悪行を犯したという別の一面とは切り離して評価しようという意図、即ち、非目的論的思考[1]を抱くSteinbeck独特の観点が窺える。後述することになるがCasyもまた非目的論的思考で物事を捉える人物であるため、この悩みは倫理上のそれではなく、あくまで自己が信仰する宗教の教えとの兼ね合いの問題なのである。Steinbeck自身も宗教による抑圧に批判的であり、*East of Eden*では教会と淫売宿は、事実上、存在価値において同程度だとさえ論じている。

> The church and the whorehouse arrived in the Far West simultaneously. And each would have been horrified to think it was a different facet of the same thing. But surely they were both intended to accomplish the same thing; the singing, the devotion, the poetry of the churches took a man out of his bleakness for a time, and so did the brothels. (Steinbeck, *Eden* 217)

非目的論的思考に沿って、それが実際に及ぼした結果のみを純粋に観察し、素直な評価を善行にも悪行にも、教会にも淫売宿にも下す事をSteinbeck、つまりCasyはよしとするのである。こうした反キリスト教的な発想を抱いたJim Casyは、その宗教というしがらみから脱け出すことを選ぶ。しかし彼はキリスト教の教えの根幹である人間愛は人並み以上に実感として持ち、いわば余計なしきたりや規範を捨て去り己の解釈による説教をただの人間としての立場から続けるのである。物語の舞台である大恐慌下のアメリカ南部で貧窮と差別に苦しんでいた「オーキー（Oakie)」と呼ばれる移住労働者たちに、Casyは宗教というフィルターを通さずに一個人として人間愛を捧げた。Steinbeckは宗教を捨てたCasyにJesus Christと同じイニシャルをはめ込んだが、この男は確かに労働者達にとっての現代のキリストだったのである。

求められて一家と同行したのではなく、自らが西へ行き、物事の真実を見極めるために一家を頼った元説教師のCasyは、Joad家の家族会議の結果、元説教師の人間は何かと便利だからと仲間入りを許可されて、いわば付属品としてはじめはJoad家に居場所を得る。単なる旅の同行者であったCasyがいかにしてJoad一家の精神に大きな影響力を持つようになったのか。きっかけはカリフォルニア（California）の真実を知ったという事実である。少数の労働者を雇うのに大量にビラを配り大量の移住労働者を集め、最も安い賃金で働く者を一時的に（そのシーズンのみ）雇うシステムは、いかにカリフォルニアが豊穣の土地であろうと労働者達がまともに暮らせない状況を作り上げており、そこは子供達が飢えに苦しみ人々が個人の利益に走る悲惨な状態となっていた。労働者の生活の実情を目の当たりにし、自分達も迫害されるに至りCasyはその不条理な社会システムに苦しむ者たちのために体制に反抗する事を選択する。彼が掲げる倫理とは、人が貧富などの違いに惑わされず互いに平等である事を求める姿勢（Ch.10, 13）である。

Casyの平等論は徹底しており、その平等という単語が指し示すものは広範囲にわたり、キリストさえも彼にとってはその範疇にある。Casyはキリストについて触れる時、自分は直接彼を知らないため彼を特別に愛することも（Ch.4）、神に祈ることも（Ch.13）できないと語る。そんな不可知論的な側面を持つ彼が最も愛するのは、人間全体である。

> "I figgered about the Holy Sperit and the Jesus road. I figgered, 'why do we got to hang it on God or Jesus ? Maybe,' I figgered . 'maybe it's all men an' all women we love; maybe that's the Holy Sperit—the human sperit—the whole shebang. Maybe all men got one big soul ever'body's a part of.' Now I sat there thinkin' it, an' all of a suddent— I knew it. I knew it so deep down that it was true, and I still know it." (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 27)

> "Heard a fella tell a poem one time, an' he says 'All that lives is holy.' Got to thinkin', an' purty soon it means more than the word says." (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 145)

それゆえに偏見に囚われない男女観を持ち、その型破りな自由への発想が聖

職者でありながら洗礼を受けたばかりの若い娘を野原へと連れ出させるのである。

Jim Casyはまた、暴力に対する暴力による反抗がいかなる結果を生むかを体現する。それはSteinbeckの非暴力による反抗の提唱であり、二通りの過程でそれは展開されている。一つはファランクス論との関わりから来るもので、8章の食前の祈りではCasyは人類が一つに集まった時、すなわち団結して利己主義を排したときのみ神聖になると語っており、仲違いを戒めている。もう一つは実際的なものであり、見聞と経験がCasyにその考えを抱かせていく。Tomに同行し彼の生家を訪れたCasyはトラクターに破壊されたその土地を見る。更に、その場に止まり孤独な抵抗活動を続けるMuley Gravesと、その微小な抵抗が強大な暴力に対しいかに無力で不毛であるかも目の当たりにする（Ch.6）。カリフォルニアのフーバビル(難民収容キャンプ)では、職権を濫用し横暴を振るっていた保安官補に暴力で応戦した自分達を客観的に考える機会を得て、虐げられた者が追い詰められた時に用いる暴力が益にならずに本人達に倍になって帰ってくる不条理を知るのである（Ch.20）。Tomたちの身代わりとなり勝者のような顔をして連行されるCasyの思うことは直後のJohn Joadの科白に示唆される。

> "He knowed about sin. I ast him about sin, an' he tol' me ; but I don'know if he's right. He says a fella's sinned if he thinks he's sinned." (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 267)

他人に罪と断ぜられた行為であっても本人がその行為に正しいとの信念を抱けば彼にとってそれは罪ではない。Casyは連行されても勝利感を味わうのである。それは人が正義と信じて振るった暴力は自分でその正当性を信じていても、時に社会によって罪と断ぜられる事があることをも意味する。相手の理不尽が許され自分達の抵抗が裁かれる状況において、耐えることのみでの反抗だけが唯一無二の選択肢であったのである。

キリスト教と比較すると、Casyの平等精神はキリストへのスタンスを除けばそれと一致し、非暴力による抵抗も「目には目、歯には歯」をキリストが否定した事を考慮に入れると一致しており、Steinbeckの倫理観はおおむねキリスト教のそれに沿っているものであることが分かる。後者に関しては、暴力や横暴に暴力で対処する事の意義にSteinbeckが懐疑的であるという事実が明白と

なっており、その考えは本作以外の著作で事あるごとに述べられており一考に値するものがある。エッセイの一つ、"A Primar on the 30's"ではSteinbeckはこう語る。

> What happened in the seats of power ? It looked then and it still looks as though the Government got scared. [...] And there must have been fear in the Administration because only the frightened fall back on force (Steinbeck, "Essays" 14)

> Fierce strikes and retaliations raged in Detroit, race riots in Chicago: tear gas and night sticks and jeering picket lines and overturned automobiles. The ferocity showed how frightened both sides were, for men are invariably cruel when they are scared (Steinbeck, "Essays" 26)

これらの持論と、*The Long Valley*における "The Raid" でテーマの一つともなっている恐怖と暴力の因果関係の発想を照らし合わせると、恐怖は自衛手段としての暴力を生み、その暴力が別の恐怖を生み出すという悪循環があり、その連鎖を生み出さないためにも人は恐怖から生まれた暴力に対して非暴力であるべきだとのSteinbeckの主張が見いだせる。非暴力を貫くことによりCasyやTomのように死や家族との別離があったとしても、暴力を振るう相手が社会システムというおおもとの問題点ではなく人間である限り、人間はシステムに踊らされ、時として利用されるという憂き目に遭うのみなのである。

Casyの思想がJoad家に波及している事が端的に分かる箇所は、20章で彼が一行と別れたとき、そして26章で彼が死亡した時である。それぞれJoad家の者たちがCasyとその精神について語っている箇所が存在する。そのCasyが死の間際に警官に浴びせる意味深長な言葉がある。

> "Listen," he said. "You fellas don' know what you're doin'. You're helpin' to starve kids." "Shut up, you red son-of-a-bitch." [...] Casy went on, "You don' know what you're a-doin'." (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 386)

これはキリストのそれと同じ言葉であると同時に “The Raid” においてDickが用いた台詞でもある。この、聖書からの引用について相棒のRootに尋ねられたDickは次のように語る。

> Dick's reply was stern. “You lay off that religion stuff, kid.” He quoted, “‘Religion is the opium of the people.’” (Steinbeck, *Valley* 102)

宗教という麻薬を断ったCasyは、性質は違えどもDickと同じ哲学を携えていた。上記のDickの台詞を受けてRootはこう語る。

> “Sure, I know.” said Root. “But there wasn't no religion to it. It was just— I felt like saying that. It was just kind of the way I felt.” (Steinbeck, *Valley* 102)

Rootの最後の台詞が、Dickが宗教とは別の観点から神を思わせるものに映ったのだということを示唆するものだとすれば、宗教から逸脱しているという点でCasyとDickは似通った存在であり、同じキリストの言葉の引用を用いたことにより、作者がそれを強調していることも分かり、ふたりがキリストを暗示する人物達であると判ずる事ができる。CasyがChristと同じイニシャルを持っている事実はそれを一層際立たせる。

Jim CasyはJoad家に思想面で影響を及ぼし、その思想はゆっくりと一家に浸透し、特にTom、Ma、Pa、Rose of Sharonは個人主義から脱却し、Casyが理想とする人間像に近づいたと考えられる。では逆にCasyはJoad家の者たちから何かしらの影響を受けたのだろうか。Peter Lisca氏は、Casyによる感化でTomは個人主義的な考え方から団体主義的なそれに変わり、Tomによる感化でCasyは理論的な考え方から実際的（pragmatic）になったと述べている。事実、Casyが起こした実際的な行動、例えばフーバビルで保安官補を痛めつけたり、釈放後に共産主義運動に加担したりといった行動には、Tomの普段は無口でおとなしいが行動すべき時は行動することを知る性質、つまりフーバビルでAlがFloydに自慢するような、普段はおとなしいが人に勝手なまねはさせない性質がおしゃべりな夢想家のCasyに影響を与えたと考えられる。物語の冒頭でCasyが自分の住む土地で起きている事に気づかず理想主義に耽っていたことも

考慮に入れると、彼自身もJoad家の者から影響を受けて、意識が変わったことがはっきりと分かる。

Casyはまた、Ma Joadからも強い影響を受けていると思われる。彼の掲げる「魂」論と、Ma Joadの家族を一つに繋げ同時に他人をも助け共生しようとする意思は、同じファランクス論という思想に帰結する。つまりMa Joadが彼に与えた影響とは、彼の理想像を体現する事により彼にその理想の正当性を確信させることであったのである。その意味でMaもまたTomと同じようにCasyをプラグマティストへと感化する役割を担っていたことになる。Ma Joadが具体的に抱いていた思想が起こした行動は後の項で述べたい。

2　Casyの後継者Tom Joadと後の展開

*The Grapes of Wrath*の物語の展開はTom JoadとJim Casyの生き様と内面の変遷が中心となっている。仮釈放されたTomが久しぶりに再会したCasyは、説教師という身分を捨てて自分の理想に沿った生き方を模索していた。当初は彼の理想を理解せず、興味も示さなかったTomだが、カリフォルニアへの旅なかで彼は移住労働者の惨憺たる状況を知り、はじめてCasyの考える共生に興味と理解を示し、その思想に影響されるに至ったのである。そのひとつが「魂」の概念であり、人を殺してしまい身を隠していたTomがMa Joadに語りかけるシーンでの彼の台詞が彼の受けた影響の深さを示している。

> "Hmm," he said. "Lookie, Ma. I been all day an' all night hidin' alone. Guess who I been thinkin' about ? Casy ! [...] But now I been thinkin' what he said, an' I can remember— all of it. Says one time he went out in the wilderness to find his own soul, an' he foun' he jus' got a little piece of a great big soul. Says a wilderness ain't no good, 'cause his little piece of a soul wasn't no good 'less it was with the rest, an' was whole. [...] But I know now a fella ain't no good alone." (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 418)

この台詞は4章でCasyが語った先述の台詞と内容の一致を見ている。システムに搾取される移住労働者のひとりとして、また個人主義者として、自分の弱さをその身で痛感したTomは、同時に個々が団体となり一つの集合体となった

時の強さを悟るのである。

フーバビルでの体験（Ch.20）がそれを端的に表しており、トゥーレリ（Tulare）から働き手を探しに来た男に待遇面に関する具体的な質問で問い詰めたFloydを保安官補が「アカ」だとして連行しようとした時に助けに入った者はTomだけであった。数人の相手に抵抗を試みない利己主義で無気力な魂を持った傍観者たちは、小さな個々の魂から大きな魂の塊としての集合体となれば、相手を追い返すことができたであろうに動こうとせず、その事件が結果的にTomの考え方を変えたのである。

それと対比させるかのように移住労働者達が団結し、勝利を収めるパターンが後に登場する。24章のウィードパッチ（Weedpatch）の国営キャンプで起きた事件がそれである。快適な設備と健全なシステムで構成された委員会のもとに警察を締め出し自治を保有していたこのキャンプには、バラバラな個々の魂ではなく、大きな一つの集合体となった魂が存在した。キャンプの外において人々に脅威を与えうる保安官ら部外者たちの介入はこのキャンプでは許されておらず、権力は労働者側にあったが、そのことのみが勝利の要因ではない。ウィードパッチの居住者らは統率のとれた集合体として団結した魂を持っており、集合体となった人間の強さで自分達の自治を守ったのである。例え自治権が剥奪されフーバビルとなったとしても、もはやこのウィードパッチのキャンプは揺るがし難い存在だったであろうことは想像に難くない。Tom自身もフーバビルとウィードパッチでは別人であり、その心情に違いがあった。フーバビルにおける彼は個人の意思、個人の正義で保安官補に歯向かったが、所詮は彼も一つの個の魂であり、それぞれ個人の枠組みで己の保身を図った烏合の衆と大きな違いはなかった。しかし国営キャンプにおいてはキャンプ居住者の総体としての意思を汲んで全員の聖域を守るために集合体の一部として働いた。その変化には当然ウィードパッチキャンプに居住する者たち自体の統率がとれていたことも影響しているが、何よりCasyの影響力が大きかった事が挙げられる。

この時点でGranpaは自分達の奪われた土地、自己のアイデンティティーが帰属する土地オクラホマ（Oklahoma）を諦めきれずに死んでゆき、Granmaはそれに連動するかのように夫の死を受け入れられずに彼の事ばかり考えながら死に、Noahは一時の憩いの場、現実逃避の場である州境のコロラド（Colorado）川から離れられずに家族を捨て、Connieは想像と大きく異なった逆境に耐えられずにRose of Sharonを捨てて逃げてしまっており、家族と共に止まっている者たちの中にも、Johnは意志薄弱として酒に溺れ自分を置いていって欲しいと

言い、Alは家族が一緒に来なくてもFloydと共に北に仕事探しに行きたいとTomに語っている。彼らは家族全体ではなく、各人の価値観と利益のみでJoad家を分断していったのである。それに対しCasyのとったTomの身代わりになるという犠牲的行為は、Joad家という魂の集合体の利益を考えての行為、つまり個の利益を優先しない行為であり、当人の語った「魂」論を実践したものであった。家族の一員でもないCasyの印象的な行動はその時Tomの心理に影響を与えたのである。事実TomはNoahやAlとは違った価値観を持っており、このTomの二人の兄弟は家族の共生による幸福よりも目前の我が身の保身を選択する利己主義者であり、対してTomはウィードパッチの国営キャンプで自分だけが仕事を得ていても、彼以外の家族の者が仕事を獲得できなかったため当然のようにその仕事を捨て家族との共生を選択している。この事実はTomがCasyの教えを理解し、それに同調している事を意味する。

*The Grapes of Wrath*ではこのように、協力して共生することの意義が語られているが、それでは個々が疎遠となって、人が孤独になった時はどのようなことになるのか。それが重点的に描かれているのは*Of Mice and Men*であり、この作品では多くの孤独な人間が登場する。

この作品ではGeorgeとLennyが自分たちだけの土地を持つために移住労働者として農場から農場へ行脚するが、ふたりの口癖は"I got you to look after me, and you got me to look after you." (Steinbeck, *Mice* 15) であり、これはふたりが一つの魂となっていることを示唆している。それと対照的に、黒人のCrooksは一人でいることの恐怖を語る。

> Crooks said, "I didn't mean to scare you. He'll come back. I was talkin' about myself. A guy sets alone out here at night, maybe readin' books or thinkin' or stuff like that. Sometimes he gets thinkin', an' he got nothing to tell him what's so an' what ain't so. Maybe if he sees somethin', he don't know whether it's right or not. He can't turn to some other guy and ast him if he sees it too. He can't tell. He got nothing to measure by. I seen things out here. I wasn't drunk. I don't know if I was asleep. If some guy was with me, he could tell me I was asleep, an' then it would be all right. But I jus' don't know."(Steinbeck, *Mice* 72)

一人でいることは怖いことであり、自分ひとりだけで生きている者も仲間が欲しいと思っている。だが、同時に個人主義から脱却して共生することも難しいことである。Lennyと組んで生活しているGeorgeにSlimは奇異の目を向ける。

> Slim looked through George and beyond him. "Ain't many guys travel around together," he mused. "I don't know why. Maybe ever'body in the whole damn world is scared of each other." (Steinbeck, *Mice* 36)

恐怖が人を疎遠にし、利己主義に走らせる。この作品ではその猜疑心から解放されてGeorgeらは一つの魂となり、自分達の夢に近づいていったが、Lennyが事件を起こし、最後に夢の破壊が訪れる。Georgeら労働者達はまた孤独に追いやられるのである。

Joad一家にとってのキリストであるCasyから最も大きな影響を受け、そのため最も近い存在であったTomだが、Casyの掲げる理想を理解しつつも、その理想と現実のギャップに直面してもいる。非暴力の反抗という理想と、暴力で抵抗せざるを得ない現実がそれである。*The Grapes of Wrath*は仮釈放されたTomが家路に向かうところから始まるが、そもそも彼が投獄された理由こそが不可避の暴力を振るってしまったことだった。Tomは酒に酔った顔見知りの男にナイフで切りかかられるという状況に正当防衛といえる暴力で対処したが、彼を待っていたものは法による懲罰であった。法という権力に彼が裁かれた事実は、彼が後に再び暴力による抵抗で、権力を笠に着た者達から苦しみを味わう事の予兆とも捉えることができる。彼が再び暴力による反抗を起こしたのはカリフォルニアのフーバビルであり、保安官補に連行されかけたFloydとCasyとでその保安官補を打ち倒してしまう。このときの代償はCasyを失うことであり、Casyは彼らの罪を一人で被り連行されてしまう（Ch.20）。暴力が不幸を生み出すことがTomには分かっていても物語で彼に起こる事件は彼の裁量では非暴力ではいられない状況ばかりであり、次に挙げる三度目の暴力もまた不可避の状況で引き起こされる。Casyが殺された時がそれであり、共産主義者のストライキ活動に加担していたCasyをつるはしで撃ち殺した男にTomは逆上して襲いかかり、結果的に殺してしまう（Ch.26）。

口が達者で仲間におしゃべりと呼ばれるCasyに対してTomは口より先に手が

出る人間であり、これらの暴力事件はTomのこの気性を雄弁に語るものである。同時にこの気性はTomが実際的な男であり、理想を頭に描いてそれを語り愚痴を言うよりも、行動を旨とする実際主義者（pragmatist）であることを示唆している。Frederic I. Carpenterはこの作品における実際主義の重要性について語っており、作品における怒りと行動の相互作用には実際主義が深く関連するとしている（Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 568）が、その実際主義を代表するものがTomだと言うことができるだろう。Tomの実際主義者としての一面は16章における、片目であることを嘆く男とのやりとりではっきりと示されている。片目であるというコンプレックスや、自分が働く廃車屋の主人にその目を蔑まれ、からかわれることを嘆き、自らの不幸を吐露するその男にTomはいらだち、不満があるならば行動を起こして問題を解決するよう叱咤する。廃車屋から出てその男と別れた後にTomはAlにこう語る。

> "Well, goddamn it, he was askin' for it ! Jus' a pattin' hisself 'cause he got one eye, puttin' all the blame on his eye. He's a lazy, dirty son-of-a-bitch. Maybe he can snap out of it if he knowed people was wise to him." (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 183)

"He's a lazy（奴は怠け者だ）"という言葉にTomの行動することに対する意識が表れている。問題に対して行動を起こして局面を打開することこそが彼の長所であり彼の美学でもあるのだ。怠けることや停滞することを嫌う猪突猛進的な行動家だったTomはCasyの感化で理屈と理想を得ることになるが、彼がCasyの思想を完全に理解した頃には既に、彼が起こした過去の行為が彼を追い詰める結果となってしまっていた。積極的に問題の解決に当たる性格だったTomは自分の行動力という長所で自分の首を絞めてしまったのである。結果的に彼が犯した暴力はそれぞれが決定的な打撃をJoad家に与え、理想とは裏腹に一家は団結ではなく分裂に向かっていく。その分裂に歯止めを掛けるのはMa JoadとRose of Sharonの二人の女である。彼女らはSteinbeckが女性に求める家庭の維持に従事することになるが、それについては後の項で述べたい。

常に家族と共にあろうとし、働き頭として一家を引っ張り、Casyに代わってその倫理観を無知と利己主義で分裂しかけた家族に浸透させていくことを読者に期待されたであろうTom Joadは、物語の途中で一行から脱落してしまう。

CasyがしたことをするつもりだとMa Joadに別れる際に伝え、それ以降作品中に登場せず、一切触れられなくなる彼の後の運命は、Steinbeckがこの反資本主義活動の結末がどうなると考えているのかを知る上で重要である。

Steinbeckの短編には"The Raid"や"Breakfast"、"Flight"等、長編とアイディアを共有しているものや内容が一部重複した小品といった趣を呈したものがある。その中で"Flight"は人を殺してしまった少年Pepéが家族の元を離れ、ひたすら逃亡するが最後には狙撃されて死に至るというものである。この作品はTom Joadの混迷した未来をある程度匂わせるものだと捉えることができる。そもそもTomがマカレスター（McAlester）刑務所に収容された原因がPepéと同じく酒の席での仲間との小競り合いであり、そんな所からも二人の類似性を思わせるからである。

*In Dubious Battle*にはTom Joadのより具体的な未来を連想させる展開がある。Tomがこれから行うつもりだというCasyのやったこと、労働争議を取り扱ったこの作品では、共産主義者のMacとJimの二人組みが引き起こすストライキとその敗北までの物語が描かれている。確かに彼らは敗北の憂き目を見るが、同時にMacはそのストライキの敗北を予見しながらも巨視的な観点からそのストライキを続けることの意義を語る。

> "We ought to go to sleep ; but you know, Jim, I wouldn't have told you this before tonight: No, I don't think we have a chance to win it. This valley's *organized*. They'll start shooting, and they'll get away with it. We haven't a chance. I figure these guys here'll probably start deserting as soon as much trouble starts. But you don't want to worry about that, Jim. The thing will carry on and on. It'll spread, and some day— it'll work. Some day we'll win. We've got to believe that." [...] " If we didn't believe that, we wouldn't be here. Doc was right about infection, but that infection is invested capital. We've got to believe we can throw it off, before it gets into our hearts and kills us. [...] " (Steinbeck, *Dubious* 161)

また、*The Grapes of Wrath*の中間章においてSteinbeckはストライキの敗北が意味するものについて叙述している。

> And fear the time when the strikes stop while the great owners live－for every little beaten strike is proof that the step is being taken. And this you can know－fear the time when Manself will not suffer and die for a concept, for this one quality is the foundation of Manself, and this one quality is man, distinctive in the universe. (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 151)

これらから分かることは、ストライキの敗北は失敗ではなく、改革になんらの支障もきたさず、むしろ将来の勝利のためにその敗北が蓄積されることが必然であるため、結果的に勝利に役立っているという作者の考えであり、決して悲劇的な結末ではないということである。また、JimはCasyのように殺されるが、この人物の死はある意味、仲間であるMacによって労働者たちを鼓舞するために利用されている。以下はJimが死んだラストシーンの引用である。

> "This guy didn't want nothing for himself—" he began. His knuckles were white, where he grasped the rail. "Comrades! He didn't want nothing for himself—" (Steinbeck, *Dubious* 349)

*In Dubious Battle*においてMacら共産主義者たちの目的は局地的な勝利ではなく全体的な勝利であり、最後にはストイックなまでの社会主義者となっていたJimはそのために自分の死が利用されることを是とするだろう。実際に、Jimは作中で"I want to be used. Now I'll use you, Mac. I'll use myself and you. I tell you, I feel strength in me." (Steinbeck, *Dubious* 280) と述べている。Jimがそう考えるようになる経緯は、有木恭子が述べているように、党の活動を社会の根底に拡げるためにはなんでも利用しろというMacの教育が影響しており（有木　105)、つまりCasyがTomを感化したように、彼らにも師弟関係があり、その点でも*In Dubious Battle*はTomの未来を暗示していると言えよう。

もう一つ他作品との類似の例を挙げると、第一次世界大戦下のドイツ軍に占領されたノルウェイの小さな町における住民たちの反乱を扱った作品、*The Moon Is Down*において住民を反乱へと導いた功労者であり、リーダーであった市長もCasyやJimのように犠牲者となる。彼の死を想像させるシーンでこの小説は終わるが、彼の処刑は住民達に更なる戦意を与えるという意味で利用されることになるだろう。

Casyの死もTom Joadの感化という結果を残しているため、これら三人の死は物語中で何らかの役に立っており、Tomがストライキを起こした結果として殺されることが運命付けられているとしてもPepeの犬死とは様相を異にしているのではないかと予想される。Tomにも元説教師のCasyのような存在感が生まれ、彼が神格化されることもありえるだろう。

Joseph Fontenroseは作品を聖書に照らし合わせ、Casyがキリストならばは Tomはモーゼに例えられ、更にTomはキリストの要素も持っていることが示唆されていると論じており、Joad家一行に宗教的な含みがあるとしている。

> The Joads are equally a family unit, the twelve tribes of Israel, and the twelve disciples. Casy and Tom are both Moses and Jesus as leaders of the people and guiding organs in the new collective organism. Each theme — organismic, ecological, mythical ; and each phase of the mythical : Exodus, Messiah, Leviathan, ritual sequence－builds up to a single conclusion: the unity of all mankind. (Steinbeck, *Grapes* 799)

TomがCasyからファランクス論を受け継ぎ、そのTomがまた別の人々に影響を及ぼしていくことはTomがCasyと同様な存在となることを意味する。宗教に反する側面—超絶主義的なCasyの魂論や労働者達の汚い言葉を用いること—と、非暴力や平等論といった極めて宗教的な側面の混在により、信仰と冒涜が共存しており、その中にあってTomはCasyと並んで宗教色の強い人物として描かれているのである。

3　Ma JoadとRose of Sharon —二人の女とSteinbeckの理想とする女性観

Casyがキリスト、もしくは神を代弁し象徴する存在であったならば、MaとRose of Sharonは女神として描かれているといえるだろう。しかし彼女らはCasyが象徴するものと直接的に関係あるもの、例えばキリストに対しての聖母マリアを象徴していたのではなく、Casyとは別のアプローチで彼と同じ境地に達しており、相対的にではなく絶対的な在りかたで一家に居場所を持っていたと考えられる。Casyから思想面においての影響は受けていても、根幹としての

信念は女性ならではの発想で身につけたものである。ここでは彼女らの独自の発想からなるその信念とCasyの思想との一致と、Casyの影響下で培われた思想の両方に触れたい。

CasyやTomと違い、Ma JoadはJoad家にただ存在するだけで一種の神秘的な影響力を家族に対し持っており、家族の中心的存在だった。

> And from her [Ma's] great and humble position in the family she had taken dignity and a clean calm beauty. From her position as healer, her hands had grown sure and cool and quiet ; from her position as arbiter she had become as remote and faultless in judgement as a goddess. She seemed to know that if she swayed the family shook, and if she ever really deeply wavered or despaired the family would fall, the family will to function would be gone. (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 76)

Casyが一家と一緒に旅をするうちに家族に徐々に影響力を発揮して言ったのに対し、"from her position as arbiter she had become as remote and faultless in judgement as a goddess"とあるように、Ma Joadは一家の母として家庭の柱と位置づけられて以来、永久に女神として在ることを運命づけられているのである。サンドラ・ベティ（Sandra Beatty）はSteinbeckの描く女性について「スタインベックの小説における女性の性格描写の研究」の中で述べており、Steinbeckは妻たちが主婦という特別な仕事、又は機能を誇らしげに果たしており、彼女らの多くによって共有される特質は彼女らの揺るぎない力であり、その力はより周囲の人々を支配するとしている。

女性は家庭にいるという事実一つで家族全体に影響力を持ち、他の誰も代わりができず、父親･夫とは別の意味で家族を統率することが多くの場合（主に逆境において）運命付けられており、Ma Joadが一家に対して持った影響力はCasyのそれとは徹底的に異質なものである。更にBeattyはMa Joadの具体的な役割に言及しており、それによるとMaはSteinbeckが女性の知恵とみなすものを集約しており、彼女は自己の裁量を遥かに越える知識を持ち、夫の落胆に気づいた彼女は家族の絶望的な状態を認識して男性の役割を担い、逆境に直面しても夫や家族に新たな力を与えうるとしている。（ベティ 27）

CasyがTom Joadらの罪をひとりで被り連行されていき、言わばJoad家のた

めの捨て駒となったのに対し、Ma Joadは一家が絶望的な状況にあるときの最後の砦であり、心のよりどころであり、男が気力を失った時のリーダーとして決して欠けてはならない存在として描かれているのである。

男が弱くなった時に女がその本来の力を発揮し、男が元気な時には女はまだ重責を担う必要がない（追従していればよい）という図式は作品を通してSteinbeckが首尾一貫として主張していることの一つである。

> The women studied the men's faces secretly, for the corn could go, as long as something else remained [...]. After a while the faces of the watching men lost their bemused perplexity and became hard and angry and resistant. Then the women knew that they were safe and that there was no break. (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 7)

> The women watched the men, watched to see whether the break had come at last. [...] And where a number of men gathered together, the fear went from their faces, and anger took its place. And the women sighed with relief, for they knew it was all right— the break had not come ; and the break would never come as long as fear could turn to wrath. (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 434)

この二つの最初と最後の中間章からの文章は相対的に述べられており、とりわけ強調されている。また"the break would never come as long as fear could turn to wrath"の一文は、恐怖と暴力の相関関係を踏まえると、怒りが決して暴力を連想させるべきものではないことも意味する。Ma Joadは、自警団もしくはスト破り風の男達の態度に怒りを示し暴力を振るいかねないTomを必死で止める(Ch.20)が、Steinbeckが理想とする女性は非暴力の、もしくは暴力を嫌う精神を持っていることも分かる。中間章からの引用に再び言及すると、Joad家においてMa JoadとPa Joadの関係は上記の「男とそれを支え、それに変わることができる女」の関係である。Paは男としての面子の失墜を嘆き、Maは何故男が力を失ったかを語ってそんなPaを諭す。

> Ma put the clean dripping tin dish out on a box. She smiled down at her work. "You get your stick, Pa," she said. "Times when they's

> food an' a place to set, then maybe you can use your stick an' keep your skin whole. But you ain't a-doin' your job, either a-thinkin' or a-workin'. If you was, why, you could use your stick, an' women folks'd sniffle their nose an' you ain't lickin' no woman you're a-fightin', 'cause I got a stick all laid out too." (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 352)

夫の自尊心を尊重しつつ、力強く家族を牽引するMa JoadはSteinbeckが求める理想の女性の条件を満たしており、自らを家族の要として認識している。家族にとってのMaは最も失ってはならない存在であり、その重要性は不明瞭な神の偶像を凌いでおり、神の加護よりも女性の存在に実際的な期待をSteinbeckが寄せていたと考えられる。

Ma Joadはまた、家族が離れ離れになっていくことを極度に嫌い、恐れてもいた。Rose of Sharonがカリフォルニアに着いたらJoad家を離れてConnieと二人で住むと彼女に告げたり、2台の車のうち片方が故障した時に自分とCasyを残して先に目的地に向かってくれとTomが提案した時などにはMaは依怙地なまでに反対した。家族を保持することにこだわるという彼女の側面は、一家を一つに繋ぎ止める存在としてもJoad家にとって重要な存在だったのである。これは理屈的なものではなく本能的に母（妻）としてのMaに備わっていたファランクス論の一側面でもある。

Ma Joadは包容力と忍耐力の権化のような人物であり、その良し悪しに関わらずSteinbeckは彼女のように力強い女性に生命の母体としての強い信頼を抱いている。ミミ・ライセル・グラッドスタイン（Mimi Reisel Gladstein）はSteinbeckが描く女性たちは生殖の機械として、種を永続させる人として小説内において作用していることを指摘しているが（グラッドスタイン 64）、それを象徴している要素がこの作品には存在する。妊婦として登場するRose of Sharonである。彼女は精神的に未熟であり、特に家庭にあっては利己的でさえありMaとは一線を画した存在、言わば弱い女性として一家にある。それは同時に、母となってはいない彼女が未だ母親へと成熟する段階にあることを示唆しており、Steinbeckが理想としている女性像がRose of SharonではなくMa Joad、つまり子供を出産した後のRose of Sharonであることを意味する。彼女が妊娠中であるという事実は、Steinbeckの理想とする生殖をつかさどる機能を持ったものとしての女性を象徴しており、「生命を育む」女性の一面が強調

されている。その「生命」は単に子供のみを指すのではなく、それより広義のもの、つまり生命の繁栄、維持を意味するものなので実際には赤ん坊である必要すらない。結果的にRose of Sharonは死産を経るが、土砂降りの雨から避難した小屋にいた瀕死の男に母乳を与え生命を救うこと（Ch.30）で、生命の供給源としての女性が浮き彫りにされる。彼女はその瞬間に母となり生命の根幹としての女神、Ma Joadと同じ存在になるのである。

> Her hand moved behind his head and supported it. Her fingers moved gently in his hair. She looked up and across the barn, and her lips came together and smiled mysteriously. (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 453)

その男を扱う彼女の仕草は母親の子供に対するそれを思わせ、男は死産で失った我が子を想起させる。生命を育むという意味でその男を救うことは赤ん坊の世話をすることと同義になるのである。

Ma Joadの存在価値はこのような女性の特性によって生まれた絶対的なものだが、それとは別に彼女の思想に影響を与えた者がおり、その最たるものがCasyである。Casyは旅の同行者ではあったが普段はTom Joadとばかり一緒にいるか、さもなければ一人でいるためMa Joadが彼の世界観を直接に聞く機会は食前や弔いの時のお祈りなど、数少ない。Granpaが死んだ時にお祈りを頼まれ断りきれなかったCasyは自分のお祈りの実際的な意味の乏しさを自覚して、"I'll he'p you folks, but I won't fool ya." と前置きして祈祷を始める。

> "This here ol' man jus' lived a life an' jus' died out of it. I don' know whether he was good or bad, but that don't matter much. He was alive, an' that's what matters. An' now he's dead, an' that don't matter. Heard a fella tell a poem one time, an' he says 'All that lives is holy.' Got to thinkin', an' purty soon it means more than the words says. (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 145)

"All that lives is holy"という言葉にはSteinbeckが意識的に用いている非目的論的思考の影響があり、人間に「格」の違いを認識せず、比較を排している。

CasyはGranpaの生き様を宗教的見地から評価したり、死に際しての特別な意義付けをしたりせず、それどころかその祈祷自体を空虚なものとして捉え、逆にそれがJoad家への不正直な愚行だと解釈している。

Ma Joadはこのようなの神、宗教への見解に影響を受け、不明瞭でかつ非実際的な宗教の精神世界やしきたりに拒否反応を示す。一行がアリゾナ（Arizona）とカリフォルニアの州境の川で休息し、Ma JoadとRose of SharonがGranmaを看病している時に死に行くGranmaのためにお祈りをしたいという女をMaは必死で追い払う。そしてその女と仲間がテントで行う祈祷に不快感を持つ。彼女らのことを善人ではあると語るMaは彼らを拒絶する自分の行為に自らの宗教への考えの変化を実感する。

> Ma's head was down, and she was ashamed. "Maybe I done them good people wrong. Granma is asleep."
> "Whyn't you ast our preacher if you done a sin ?" the girl asked.
> "I will— but he's a queer man. Maybe it's him made me tell them people they couldn' come here. That preacher, he's getting' roun' to thinkin' that what people does is right to do." (Steinbeck, *Grapes* 212)

Casyは直接的に宗教のしきたりやそれに連なるものを否定したわけではないが、Ma Joadは彼の "what people does is right to do" という考えに感化され、実際主義的な考え方をするようになる。それはキリスト教の教えとは相容れないものであるが、同時にMaが実際に起こす行動はCasyと同じくキリスト教的な人間愛から来るものであり、彼らにキリスト教的倫理観を抱かせつつ、しかし教会的なものを否定させる。Steinbeckはここにおいて自らの宗教観を提示しているのである。

それはMa JoadやJim Casyと逆の宗教観を持った者たちを否定的に描写することで強調されている。その典型がウィードパッチの国営キャンプでRose of Sharonにダンス（性的なニュアンスを含む）と死産の因果関係について語るLisbeth Sandryという女である（Ch.22）。

> Mrs. Sandry's eyes stared. "Nice" she cried. "You think they're nice when they's dancin' an' huggin' ? I tell ya, ya eternal soul ain't got a chancet in this here camp. Went out to a meetin' in Weedpatch

las'night. Know what the preacher says ? He says, 'They's dancin'an'huggin' when they should be wailin' an' moanin' in sin.'That's what he says. 'Ever'body that ain't here is a black sinner,' he says. I tell you it made a person feel purty good to hear 'im. An' we knowed we was safe. We ain't danced." (Steinbeck, *Grapes* 2nd ed. 320)

キャンプの者たちからはLisbeth Sandryは悪人ではなく善人であり、善行と信じ人々に忠告し、脅して回っている女として知られているが、このような彼女の説教はRose of Sharonを怯えさせ、神や牧師の名を借りて脅迫する姿は人々の災厄そのものである。純粋な宗教観や倫理観の違いのみで彼女はCasyやMa Joadと対照的な悪魔を思わせる存在となっているのである。また、彼女がことさら強調する罪の概念もCasyのそれとは相容れないものである。一般的に罪として糾弾されるものを本人が罪と自覚していなければ罪ではない、とCasyが語るのに対し彼女は、「まわりには罪びとがたくさんいる」、「あのキャンプには邪悪が満ちている」と独善的な価値観で多くの人々を糾弾する。Ma JoadやCasyの精神世界を救いの、寛容の思想と捉えるならば、彼女のそれは人々を破滅に導く思想である。

Joad一家にもLisbeth Sandryと似通った宗教観を持った人物、Granmaがおり、Ma Joadとはかけ離れた人間性で一家の足を引っ張っている。彼女はCasyにお祈りを強要し、自身の宗教世界に陶酔しており、実際にはCasyの説教の内容など耳に入っておらず、食前に説教師のお祈りを聞く、という形式にのみ固執している。言わば彼女にとってのお祈りとはお気楽な音楽や祭りであって、彼女の愚かさを補うものとして機能する崇高なものではなく、表層的なものである。説教師の言葉の区切りに「アーメン」や「ハレルヤ」と唱えることで自らの哀れな魂を鼓舞する様はひたすら滑稽であり、そこにSteinbeckが人々と宗教の間の真理などを見出していないことは明白である。先述のカリフォルニア州境の川辺で会った、お祈りをしたいという女をMa Joadは追い払ったが、Granmaに意識があれば本人は喜んで祈祷を受け入れたのではないだろうか。彼女の惨めな死に様は、上面だけのキリスト教盲信をSteinbeckが戒めていることを意味する。

Steinbeckの諸作品における女性の登場人物たちの人間性は時に画一的であ

り、そこにSteinbeckの女性に対する捉え方を見出すことができる。作者は男の仕事と女の仕事をはっきりと分けており、主に女性の仕事は家事である。女達は何の疑問も抱かず従順に家庭の天使を演じており、それはMa Joadも例外ではない。天災が起き作物が育たなくなると女たちは男たちの顔を窺い家族のリーダーとしての男に人生を委ねる。このような思考は共時的な家庭を忠実に再現したといえなくもないが、良い家庭における力強い妻、もしくは母を描くにあたっては不十分である。数少ない例外の一人を挙げるならば*East of Eden*のCathie[2] がいるが、彼女は家庭の天使から脱却して女性の自立を図ったのではなく、家庭を見捨てて自己快楽に走った悪として表現されている。男性社会に従順でない数少ない女性の一人、家庭の枠組みから逸脱した女性を悪として描くという事実は皮肉的である。Steinbeckは強い女性は描いても自立した女性は描かない。象徴的なRose of Sharonのラストシーンも、母乳を与えるという極めて家庭と密接に関わった行動がSteinbeckの女性観を浮き彫りにしており、宿命的に家庭を背負う未来の彼女の姿を連想させる。SteinbeckはMa JoadをしてJoad家から離脱を図る彼女を制止したが、その出来事はファランクス論の肯定と共に女性の自立の否定も兼ねているのである。この国のSteinbeckの時代においては、このような女性に対する考えを持っていた作家はむしろ数多かったであろうが、Steinbeckはその多勢の中の一人であり、偏見を捨てることはなかった。その点ではこの作家は平凡であったと言わざるを得ない。時間が経つと共に過去の作家となっていった一因がそれであるとも言えよう。しかしこの作家は決して女性蔑視的であったわけではなく、むしろ精神的に強い女性を、男性に対してよりも尊敬してさえいた。この点では同時代の他の作家と一線を画しており、女性が男でない自分に相対的な自信を持つきっかけになりさえすると思われる。Steinbeckは両性の違いを明確に捉えることで、それによる利点も欠点も浮かび上がらせる一長一短の思想を持っていたのである。

4　結論に代えて

*The Grapes of Wrath*からアメリカの労働問題の糾弾という、言わば上皮を取り除くと、見えてくるのはSteinbeckの人間観であり宗教観であり女性観である。他作品でもその思想から外れるものはほとんど見られず、生涯首尾一貫したものであることが分かる。その思想をこれまで述べてきたことを踏まえ順に総括することで結論に代えたい。

Steinbeckは他作品でも同じ哲学を直接的に綴るため、語りは大概作者の主観であることが一目瞭然であり、それは言い換えれば彼の作品が社会への主張を多分に含んでおり、純粋な芸術としての文学ではないことを意味する。この作家が「社会派」や「自然主義文学」の枠組みで捉えられる大きな要因の一つがその強烈な社会性によるものであることは言うまでもなく、そのことを考慮するとJoad家から目を離して一般的な事象を語る中間章が最も重要な部分だという説は、それを蛇足だとする説よりも説得力がある。叙述のみの中間章は作者の思想の真髄ともいえるものなのである。その中間章において最も多く触れられる事柄は移住労働者達の団結、すなわちファランクス論の結実へのプロセスである。特に17章はSteinbeckが理想とした相互扶助の形を示しており、CasyやTom Joad、Ma Joadが求めるべきものがそこに書かれてある。物語ではJoad家の結末が語られていないため、人々が団結して劣悪な社会システムを打倒する強固な集団へと発展する最後のプロセスもまた不明となっているが、それはSteinbeckの他作品、*In Dubious Battle*や*The Moon Is Down*がある意味この作品の結末を暗示している。Tomの死と労働者達の敗北から生み出される勝利である。*In Dubious Battle*ではJimの死が労働者達のストライキのために利用され、そのストライキの敗北は次のストライキのために利用され、*The Moon Is Down*では市長の死がその町の住民のドイツ軍への怒りに利用されることにより、勝利のための敗北が描かれているからである。Steinbeckは強権を行使する強者に弱者が将来、勝利することを信じているのである。

Steinbeckは作品中において宗教、キリスト教を強く意識している。CasyやMa Joadを神格化し、狂信的に教義に凝り固まる人々に対して懐疑的である。彼にとって神や宗教は制限や罰を与えるものではなく、救いのみを人に与えるものだからである。作品に対して当時の聖職者からは賛辞も批判もあったようだが、このある意味都合のいい宗教観は首尾一貫とした非目的論的思考に沿ったものだとも考えられる。つまりキリスト教の教えを包括的に関連付けて捉えるのではなく、その個々の要素を独立したものとして捉えているのである。

Steinbeckの女性観は今日では受け入れ難いものであろう。家庭のために生きる女性を理想とするのは現代では性差別の一言で切り捨てられる。彼が優れた女性と捉えるのはMa Joadに代表される、包容力があり人間愛に満ちている女神のような存在であり、彼はその女神に家事を従順にこなすことを求める。女性蔑視的でさえあった当時の文学の世界にあって、女性に対し尊敬の念を抱きつつも、その男根主義からこの作家は脱却できていないのである。だが

Steinbeckが女性に理想像を押し付け、厳しい眼を注ぐことは、求めるに値する価値を女性に見出しているからとも考えられる。社会に対する厳しい批判をぶつけるこの作家は、同時にこのような本能的な思考も持ち合わせており、人間の本性に一定の信頼を寄せているのである。

注

1　Steinbeckの友人で*The Log from the Sea of Cortez*の共著者であるEd Ricketttsの論文に賛同したSteinbeckがほぼ同じ内容の文をRicketttsの了承を得てその本に載せたもので、あるものが存在する時、その存在を理解し、受け入れること。理由を逐一述べるのではなく、それ(目的論的思考)をも包括した存在をありのままに受け入れる思考。(詳細は*The Log from the Sea of Cortez*の14章を参照のこと)

2　このCathieという人物はSteinbeckの離婚した妻がモデルになっていると思われ、その時彼女に子供が彼の子ではないことをほのめかされたという。(大阪教育図書「エデンの東（下)」訳者解説を参考にした)

参考文献目録

Steinbeck, John, writ. Lisca, Peter and Kevin Hearle, eds. *The Grapes of Wrath: Text and Criticism.* New York : Penguin, 1977.

——. *The Grapes of Wrath: Text and Criticism.* 2nd ed. New York: Penguin, 1997

Steinbeck, John. *In Dubious Battle.* London: Penguin, 1992

——. *East of Eden.* New York : Penguin, 1992

——. *Of Mice and Men.* New York : Penguin, 1994

Nakayama, Kiyoichi and Eiichi Hirose eds. *Selected Essays of John Steinbeck.* Tokyo : The Shinozaki Shorin Press, 1981

Steinbeck, John writ. Onoe, Masaji ed. *The Long Valley.* Tokyo : Nanundo, 1953

サンドラ・ベティ「スタインベックの小説における女性の性格描写の研究」、テツマロ・ハヤシ編　山下文昭訳『スタインベックの女性像』(旺文社、1991)

ミミ・ライセル・グラッドスタイン「スタインベックの女性の登場人物たち」、テツマロ・ハヤシ編　山下文昭訳『スタインベックの女性像』(旺文社、1991)

ジョン・スタインベック著、仲地弘善訳『コルテスの海航海日誌』(大阪教育図書、1997)

——、大久保康雄訳『怒りの葡萄（上·下)』(新潮社、1967)

——、鈴江璋子、掛川和嘉子、有木恭子訳『エデンの東（上·下)』(大阪教育図書、1999)

——、廣瀬英一、小田敦子訳『疑わしき戦い』(大阪教育図書、1997)

——、白神栄子訳『月は沈みぬ』(大阪教育図書、1998)

——、大浦暁生訳『ハツカネズミと人間』(新潮社、1994)

有木恭子「『疑わしき戦い』－「疑わしさ」の検証」、中山喜代市監修『スタインベックを読みなおす』(開文社出版、2001)

井上謙治「スタインベック」、安宇植（他）編『集英社世界文学大辞典（2巻)』(集英社、1997)

Steinbeck Estimated for the Description of Characters in *The Grapes of Wrath*

The Grapes of Wrath (1939) has been taken just as a journalistic fiction of social criticism, which condemned terrible farming system of U.S.A.. However, the work shows not only the problems of American farming system in the past but also Steinbeck's philosophy and thoughts about so many things. Particularly four main characters (i.e. Casy, Tom and Ma Joad, Rose of Sharon) have their own philosophies.

Jim Casy, an ex-preacher, is originally a sub-member in the caravan of Joads at first but he begins to show the great leadership when he is confronted with the fact of Californian debilitated farming system. Although California is quite fertile a state and the owners of the lands always make huge amount of money, the migrant workers like Joads, who are called "Oakie," are not paid enough. Moreover, he comes to know that people get treated even worse if they have courage enough to complain to their landowners. They have to unite themselves as one big soul.

The next leader, Tom is not interested in Casy's philosophy at first because he thinks "action" is more effective than "argument." However, he comes to know that physical reaction like violence would sometimes make problems worse even if he is right. Therefore he learns Casy's thoughts would be right at least in such a circumstance.

If men lost their anger and begin to show fear in their faces, women will lead their families. Therefore, when Tom leaves the family, Ma and Rose of Sharon lead them by their own way. Steinbeck thought women were obviously different from men but it is not appropriate to regard that he was a mere sexist. He wanted women to be messiahs of families when men's power is gone for his reliance on women's ability to save home.

In Chapter 1, I will refer to Casy and his religion, how he affects Joads' way of thinking, and the resemblance of Casy and Christ: the chapter shows

Steinbeck's religious view. In Chapter 2, Tom Joad's growth as a communist and his life after this story are discussed: this chapter sees how Steinbeck tries to end this family tragedy and how Casy's thought would (not) solve the problem. Chapter 1 and 2 also analyze Steinbeck's "argument of Phalanx" and denial of exclusive individualism. In Chapter 3, I will deal with Ma Joad's effectiveness on her family and how Rose of Sharon comes to be like Ma, Steinbeck's image of a great mother — an icon of Goddess.